採訪記録

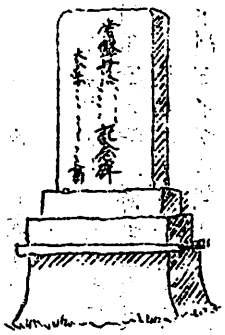
常盤井路記念碑

郷土碑文巡り（十）

会員　山本　保
（佐伯市　沈船）

弥生町立切畑小学校の校庭に、次のような右きの記念碑が建てられています。

碑面の正面には、次のような文字が刻まれ、その台石には、功労者の名前がずらりと並んでいます。



（正面）

常盤井路耕地整理隧道開鑿記念碑

大分県知事　細田徳寿　書

（左側面）

昭和三十年一月建立

常盤井路土地改良区

（右側面）

自昭和十九年至昭和二十三年

事業費五百拾八万五千円　補助金二百五拾九万（八千円）

総反別七拾八町三反五畝歩　組合員数二百二名

（台座）

県農地部耕地課長　松永一郎（以下）長野清治郎

辻田正夫　南海部地方事務所長　小林明治

以下、切畑村長・収入役・組合長・庶務主任・会計主任・書記・評議員・組合会議員・工事施工者等、そして、碑文是永奈良吉撰、五十川一太書、石工尺立進の名前が、正面・側面・裏面にきれいに刻まれています。

（碑背の碑文）

番匠川の清流に沿うて、文化十年、時の大庄屋幽斎左衛門が開鑿した、延々一八〇〇米の水路がある。

南海部郡唯一の平坦地切畑村の大部分の田園は、これにより灌漑されておるも、何分幹支線水路や井堰が不完全な為、恵まれた耕地を十分増産に役立たせることができなかった。

そこで当時、県会議員平岡京佑発起の下に、昭和八年常盤井路耕地整理組合を設立し、一応工事を完成した。

処が無情にも、昭和十八年の大暴雨は、番匠川の堤防を決潰し、濁流は滔々と流入し、七十町歩の耕地は一瞬にして泥田と化した。その上、翌年も亦その翌年も、この地に雨災害をもたらした。

組合員は泣いても泣ききれなく、呆然自失するばかりであった。然し時のたつのにつれて農家の本分を蘇らし克く蹶起し、空襲下におって、工事費三十三万円を投じ、農道新設、六、五三〇間の水路、三方堰九、七四一間の区画整理を完成した。けれども、幹線水路が番匠川に沿っておる為、水害の度に被損し、莫大な維持費を要するので、昭和二十一年、取り入れ口を起点とし、三角形の一辺に向って、破天荒ともいうべき隧道開鑿に着手した。

工事費百九十四万円、長さ五〇三米、当時としては、費用や機械化において稀に見るものであったが、県の指導と請負業星野工業株式会社の献身的精神と

地元の協力によって、翌年、荒石の難工事も人力と機械力に征せられ、久しい夢であった待望の隧道開鑿を完成させた。

続いて、隧道下の水路の改修を完成するなど、組合員の増産意欲は、常に困難に堪え、遂に不可能を可能とした。

今日我々が、心おきなく増産に励むことのできることを考えると、実に感慨無量である。

昭和二十四年には、土地改良法が制定されたので、常盤井路耕地組合を改組し、常盤井路土地改良区とした。茲に記念碑建設に当たり、事業の概要を記録し、後世に残す。

常盤井路は、文化十年（一八一三）、佐伯藩主十代毛利高翰の時、藩士田原親興、切畑村大庄屋出納藤左衛門等の計画により、堰を番匠川の上流中野村（なかの）に設けて、水門を東方に開き、農業用水を切畑村大字門田（かどた）宮真弓鶴まで流れるようにしました。その結果、大字細田（ほそだ）・平井・門田部落は、積年の旱害を一掃することができました。

この井路の長さは一里拾八町余に及んでいます。

文化十一年七月着工、文政元年（一八一八）五月完成、四年がかりの大工事でした。

「岩石ノ上ニ薪炭ヲ積ミ、之ヲ焼キテ僅カニ破砕セシニ過ギズ、多クハ鑿ヲ以テ穿チシモノナリ。人夫一人一日ニ石屑一升ヲ掘リ得ル者ヲ以テ一等工夫トナシタリト」

「朝ニ星ヲ戴キ、夕ニ月ヲ踏ミ、甚辛惨憺ヲ極メタリ」

「夫役参万余人、経費参拾七貫二百二匁二分五厘（内拾二貫二百三匁余ハ出納藤左衛門ノ自弁）」

と記録に残っています。

まさに、常盤井路隧道は、佐伯藩の「青の洞門」と云ってよいでしょう。

当時の刻苦勉励、不撓不屈の精神には、頭が下がります。

（おわり）

おしらせ

萬葉歌碑「白水郎（あまのうた）歌」建設

―― 弥生所に歌碑の話が進んでいる ――

万葉集巻十六にある豊後白水郎の歌について、東京の御手洗一而会員の書いたものがある。

豊後国白水郎歌一首

紅（くれない）の　深（こ）而之衣　雨零而　尓保（にほ）比波雖為　移波米也毛

紅に　染めてし衣　雨零りて　にほひはすとも　移ろはめやも

歌の大意はこうである。

「いったん紅に染めた着物は、たとえ雨にあって、色が美しくなることはあっても、色があせるということがありましょうか、そんなことはありません」

この「白水郎の歌」を石に刻んだ万葉歌碑を、今建設する方向で話が進んでいると聞く。

弥生町は佐伯市に次いで以前から歌人が多かったが、最近は高令者の短歌教室が盛んである。わが史談会員の中にも弥生町の短歌会員が数名ある。うれしい話である。

佐伯には文学碑が少ない。僅か五指を屈する位しかない。その位文学が貧困なのであろうか。否と答えたい。

文学を大事に思い、詩や歌や俳句を身近くにおき、生活の中にとり入れる努力が足りないのではなかったか。